

総目次

第一卷

凡例

まえがき

序論—自分を知るとはいかなることか

第一章 私とは何者であるか

第二章 私に分からなくなる私

第三章 私の探求の課題である私

第I部 A子の話

A子の話—ナルシスとナルシズムについて

第四章 ナルシスの話

第五章 A子の話

第六章 ナルシスとナルシズム

第七章 ナルシズムの成立条件

第八章 ナルシズムにおける「鏡」の意味

第九章 ナルシズムにおける「映像」の意味

第一〇章 ナルシズムにおける「恋」の意味 1——恋の対象

第十一章 ナルシズムにおける「恋」の意味 2——恋の対象に対する恋する者の在り方

第十二章 ナルシズムにおける「恋」の意味 3——ナルシスの恋の虚偽性

第十三章 ナルシズムにおける「恋」の意味 4——A子の場合

第十四章 ナルシズムにおける「死」の意味 1——ナルシスの死

第十五章 ナルシズムにおける「死」の意味 2——A子の死

第十六章 ナルシズムにおける「死」の意味 3——硬化の死

第Ⅱ部 捨八の話

捨八の話

第一章 捨八の生い立ち

第二章 捨八の絶望

第三章 捨八の小学生時代

第四章 捨八と百合子 1

第五章 捨八と百合子 2

第六章 捨八の徒弟時代

第七章 捨八の失恋

総目次

第八章	捨八のヤクザ時代	1
第九章	捨八のヤクザ時代	2
第一〇章	捨八と組長	1
第十一章	捨八と組長	2
第十二章	捨八とあねさん	
第十三章	捨八と留吉	1
第十四章	捨八と留吉	2
第十五章	捨八と留吉	3
第十六章	捨八と留吉	4
第十七章	捨八と留吉	5
第十八章	捨八と留吉	6
第十九章	捨八村に帰る	
第二〇章	捨八山に入る	
第二一章	捨八とサルたち	
第二二章	捨八の山小屋生活	
第二三章	捨八と権太郎	
第二四章	捨八と母	

第二十五章 自分を知るとはいかなることか

第Ⅲ部 愛の諸形態

一 愛と対象

第一章 愛の意味の自明性

第二章 愛することと生きること 1——その区別

第三章 愛することと生きること 2——その相即

第四章 愛の対象としての自己と世界

第五章 「物」に対する愛と「人」に対する愛

第六章 「物として」愛する愛と「人として」愛する愛

第七章 「人として」愛する愛のうちに含まれる自愛と他愛

第八章 「人として」愛する愛のうちに含まれる自愛と他愛 2——自愛のうちに含まれる他愛

第九章 「人として」愛する愛のうちに含まれる自愛と他愛 3——他愛のうちに含まれる自愛

第一〇章 愛することに伴う苦しみの原因 1——死別による悲しみ

第十一章 愛することに伴う苦しみの原因 2——愛する者が自分から離れてゆく場合

第十二章 愛することに伴う苦しみの原因 3——苦しみの具体例

第十三章 愛することに伴う苦しみの原因 4——愛されることを求める自愛

第十四章 物の所有と心の所有 1——心における欠乏感

第五章 物の所有と心の所有 2——欠乏感の克服の試み

第六章 人間嫌いの愛 1——人間への愛から人間嫌いへ

第七章 人間嫌いの愛 2——人間嫌いの愛の対象

二 愛と了解

第八章 自愛と他愛——自愛、他愛、その根底にある愛そのもの

第九章 愛と了解 1——ある母娘の話

第十章 愛と了解 2——母の娘に対する愛の考察

第十一章 愛と了解 3——娘の母に対する愛の考察

第十二章 愛と了解 4——愛と憎しみ

第十三章 愛と了解 5——母娘の間に生じた憎しみの関係

第十四章 愛と了解 6——娘の後悔

第十五章 愛と了解 7——娘の絶望

第十六章 愛と了解 8——娘、母を見る

第十七章 愛と了解 9——母についての了解の深化

第十八章 愛と了解 10——他者了解と自己了解との関係

第十九章 愛と了解 11——自己了解の崩壊

第三十章 愛と了解 12——自己了解の崩壊とともに開かれてきた新しい了解の地平

第一章 愛と了解 13——孤独の意識と真実の孤独

第二章 愛と了解 14——自愛の極限としての自殺

第三章 愛と了解 15——現れた母において見たもの

第四章 愛と了解 16——世界了解の深化

第五章 愛と了解 17——フィナーレ

三 愛と共感

第三章 愛と共感 1——愛のもとにある了解

第三章 愛と共感 2——自己了解のもとにある経験

第三章 愛と共感 3——他者了解のもとにある共感

第Ⅳ部 疎外の問題

疎外の問題

第一章 疎外の問題

第二章 疎外の構造 1——疎外される者の側から見られた

第三章 疎外の構造 2——疎外する者の側から見られた

第四章 疎外の構造 3——仲間に入れないという疎外

第五章 仲間の構造 1——仲間とは何か

第六章 仲間の構造 2——仲間と個人との先後関係

総目次

第七章	仲間の構造 3	仲間形成における運命と自由
第八章	仲間と個人 1	仲間の生成発展における個人の役割
第九章	仲間と個人 2	仲間の目的と義務の成文化
第一〇章	仲間の分節 1	分節の必然性
第十一章	仲間の分節 2	権力者と被支配者への分節
第十二章	仲間と権力 1	権力と権力の座
第十三章	仲間と権力 2	権力の座の形成
第十四章	仲間の分裂	分節から亀裂へ
あとがき		
解説		
総目次		
索引		

第二卷

凡例

まえがき

第Ⅰ部 愛の諸形態——エロス愛について

第一章 愛の多義性——愛の意味についての問題

第二章 エロスとしての愛 1——宇宙的愛としてのエロス

第三章 エロスとしての愛 2——人間的愛としてのエロス

第四章 エロスとしての愛 3——人間相互愛としてのエロス

第五章 エロスとしての愛 4——知恵の愛としてのエロス

第六章 エロスとしての愛 5——エロスの愛の特質

第七章 エロスとしての愛 6——われわれの愛の経験におけるエロス

第八章 エロスとしての愛 7——エロスの明暗

第九章 エロスとしての愛 8——エロス愛についての問題

第一〇章 エロスとしての愛 9——「物」に対する愛におけるエロスと「人」に対する愛におけるエロス

第十一章 エロスとしての愛 10——エロス愛に還元されない愛

第十二章 エロスとしての愛 11——エロス愛を妨げる原因としての社会の道德

第十三章 エロスとしての愛 12——道德とエロス愛

〔補講〕 エロス愛の要約と、*philia*, *agape* 愛との関係

第Ⅱ部 愛の経験

第一章 愛の経験の自明性

第二章	愛する経験と愛される経験
第三章	愛の経験の多義性
第四章	愛の経験における共通的なもの
第五章	憎みの経験
第六章	憎みの原因
第七章	憎みと愛
第八章	憎みの根底に存する自愛
第九章	すべての愛の根底に存する自愛
第一〇章	すべての愛と憎みの根底にある自愛
第十一章	自愛と自己
第十二章	自己とは何か——自己の二重構造
第十三章	自己の二重構造はどこから生じるか
第十四章	二重構造の原因としての精神と肉体——まず肉体について
第Ⅲ部	好きと嫌い
第一章	自愛と他愛
第二章	愛の三つの意味
第三章	愛に対立するもの

- 第四章 三つの愛相互の關係
- 第五章 愛の対立の中間領域
- 第六章 好き嫌いの対象
- 第七章 食物の好き嫌
- 第八章 好き嫌いの原因
- 第九章 好き嫌いと先入見
- 第一〇章 体質と氣質
- 第十一章 好き嫌いの限界
- 第十二章 好きが嫌いに転化する第二の条件
- 第十三章 好きが嫌いに転化する二つの限界状況の關係
- 第十四章 嫌いが好きに転化する条件
- 第十五章 嫌いが好きに転化する限界状況における心的条件の作用
- 第十六章 好き嫌いの愛のもとに存する自愛
- 第十七章 嫌いが好きに移る限界状況における心的条件
- 第十八章 自己愛の二重構造
- 第十九章 まとめと残された問題

第IV部 プラトンのエロス論

第一章 愛の自明性と多義性

第二章 愛の三つの形態

第三章 『シユンボジオン』の構成

第四章 パイドロスの演説 1——エロスは「最も年長の神」である

第五章 パイドロスの演説 2——エロスの根原性

第六章 パイドロスの演説 3——人間のうちにはたらくエロス

第七章 パイドロスの演説 4——生命力としてのエロスと情熱としてのエロス

第八章 パイドロスの演説 5——美しいものに憧れるエロス

第九章 パウサニアスの演説 1——エロスとアプロディテ

第一〇章 パウサニアスの演説 2——天上のアプロディテと現世のアプロディテ

第十一章 パウサニアスの演説 3——行為の根原としてのエロスと行為の仕方を規定するアプロディテ

第十二章 パウサニアスの演説 4——現世のアプロディテとともにはたらくエロス

第十三章 パウサニアスの演説 5——天上のアプロディテとともにはたらくエロス

第十四章 エリクシマコスの演説 1——人間的エロスの二元論から宇宙的エロスの二元論へ

第十五章 エリクシマコスの演説 2——身体における「善いエロス」と「悪いエロス」

第十六章 エリクシマコスの演説 3——音楽におけるエロス

第十七章 エリクシマコスの演説 4——天文学におけるエロス

- 第十八章 エリクシマコスの演説 5——予言術におけるエロス
- 第十九章 エリクシマコスの演説 6——天上のエロスとハルモニア
- 第二〇章 エリクシマコスの演説 7——エロスとテクネー
- 第二一章 アリストファネスの演説 1——人間に対して親愛なエロス
- 第二二章 アリストファネスの演説 2——三種の人間とその分割
- 第二三章 アリストファネスの演説 3——二つの問題に対する解答
- 第二四章 アリストファネスの演説 4——解答についての疑問
- 第二五章 アリストファネスの演説 5——ノモスと現実
- 第二六章 アリストファネスの演説 6——ノモスの規定する権利と義務
- 第二七章 アリストファネスの演説 7——不幸の根原としての理想と現実との相克
- 第二八章 アリストファネスの演説 8——エロスは人間を救いうるか

(二)「あなた方の父」なる神

- 第一章 キリスト教と愛
- 第二章 二つの愛
- 第三章 二つの神の知り方
- 第四章 「父なる神」の二つの意味
- 第五章 「あなた方の父」なる神 1——『マタイによる福音書』第五—七章における用例

- 第六章 「あなた方の父」なる神 2 — 「あなた方」とは誰か
第七章 「あなた方の父」なる神 3 — 「あなた方」と異邦人
第八章 「あなた方の父」なる神 4 — 「あなた方」と偽善者
第九章 「あなた方の父」なる神 5 — 「パリサイ人」と偽善者
第一〇章 「あなた方の父」なる神 6 — イエスとパリサイ人との対立
第十一章 「あなた方の父」なる神 7 — パリサイ人の偽善性
第十二章 「あなた方の父」なる神 8 — パリサイ人の偽善の根原
- (二) イエスと群衆
- 第十三章 群衆の立場
第十四章 群衆の苦しみ 1 — 病いの苦しみ
第十五章 群衆の苦しみ 2 — 社会的圧迫
第十六章 群衆の苦しみ 3 — 救いの道としての宗教
第十七章 ユダヤ教と群衆 1 — ヘロデ王とユダヤ教
第十八章 ユダヤ教と群衆 2 — 祭司と学者
第十九章 ユダヤ教と群衆 3 — 神殿と祭司
第二〇章 ユダヤ教と群衆 4 — 神殿と幕屋
第二十一章 ユダヤ教と群衆 5 — 祭司の階級

第二二章 ユダヤ教と群衆 6——祭司とレビ人

第二三章 ユダヤ教と群衆 7——パリサイ人、律法学者と会堂

あとがき

解説

索引

第三卷

凡例

まえがき

第I部 アガペーとエロス

第一章 アガペーとエロス 1——「アガペー」としてのキリスト教的愛

第二章 アガペーとエロス 2——アガペーとエロスの混合

第三章 アガペーの構成要素 1——神の愛としてのアガペー

第四章 アガペーの構成要素 2——アガペーは自発的で動機づけられない

第五章 アガペーの構成要素 3——アガペーは価値に対して無関心

第六章 アガペーの構成要素 4——アガペーは創造的である

第七章 アガペーの構成要素 5 — ハルナック批判

第八章 アガペーの構成要素 6 — 罪の許しの問題

第九章 アガペーの構成要素 7 — 神と友なる関係に入らしめる

第一〇章 アガペーの構成要素 8 — 神と人間との fellowship

第十一章 アガペーの構成要素 9 — マックス・シェーラー説の批判

第十二章 アガペーの構成要素 10 — ニグレンにおける神と友なる関係

第十三章 ニグレンのアガペー説に対する批判 1 — fellowship におけるベルソナの応答の問題

第十四章 ニグレンのアガペー説に対する批判 2 — 十人の重い皮膚病患者とイエスのアガペー

第十五章 ニグレンのアガペー説に対する批判 3 — 一人の重い皮膚病患者とイエスのアガペー

第Ⅱ部 キリスト教的愛について — 自分のように人を愛するとは？ 三つの愛、エロス、アガペー、

愛の交わり

第一章 キリスト教と愛

第二章 神を愛するとはいかなることか

第三章 人を愛するとはいかなることか

第四章 「自分を愛するように」とはいかなることか

第五章 「自分を愛するように」 についての問題 1

第六章 「自分を愛するように」 についての問題 2

第七章	「自分を愛するよう」についての問題 3
第八章	「自分を愛するよう」についての問題 1 についての考察
第九章	「自分を愛するよう」についての問題 2 についての考察
第一〇章	「自分を愛するよう」についての問題 2 についての考察
第十一章	「自分を愛するよう」についての問題 3 についての考察
第十二章	神の二つの恵み
第十三章	二つの信仰
第十四章	第一の信仰——カリスマに対する信仰
第十五章	第二の信仰——感謝の信仰
第十六章	二つの恵み——第一の恵み
第十七章	恵みと感謝
第十八章	愛の二つの対象
第十九章	イエスの愛
第二〇章	感謝と愛
第二一章	感謝と愛（続き）
第二二章	三つの愛の比較
第二三章	愛の交流の発展

第二章 救済の愛

第Ⅲ部 二つの掟、特に第二の掟について生じる諸問題の考察

第一章 最も重要な二つの掟

第二章 律法における二つの掟

第三章 律法における第二の掟

第四章 第二の掟における隣人の地位

第五章 第二の掟における隣人の地位（続き）

第六章 律法の立場からみられた第一の掟と第二の掟との関係

第七章 福音の立場からみられた第一の掟と第二の掟との関係

第八章 第二の掟について生じる諸問題

第九章 旧約における「隣人」の意味

第一〇章 イエスにおける「隣人」の意味

第十一章 「隣人である」ことと「隣人となる」こと

第十二章 「自分のように」について生じる諸問題

第十三章 「自分のように」が付加される理由

第十四章 愛される「自分」とは何か

第十五章 他人を自分のように愛することができるか

第十六章 他人を自分のように愛することは可能である

第十七章 他人を自分のように愛することのできる根拠

第十八章 他人を自分のように愛しうる可能性の根拠としての「共通性」

第十九章 「共通性」に基づいて成立する倫理

第二十章 「共通性」の倫理の限界

第二十一章 「共通性」の倫理から「普遍性」の倫理へ

第二十二章 「普遍性」の倫理としてのストア哲学

第二十三章 「普遍性」の倫理と現実——エピクテトスの場合

第二十四章 「普遍性」の倫理と現実（続き）——マルクス・アウレリウスの場合

第Ⅳ部 律法における倫理

第一章 最も重要な掟

第二章 律法における二つの掟

第三章 律法における神の愛と正義

第四章 律法における隣人愛の掟 1——神聖法集『レビ記』第一七—二六章

第五章 律法における隣人愛の掟 2——『レビ記』第十九章

第六章 律法における隣人愛の掟 3——『レビ記』第十九章（結）

第七章 律法における隣人愛の掟 4——『レビ記』第十九章五—八節

第八章 律法における隣人愛の掟 5 — 『レビ記』第十九章九—一〇節
第九章 律法における隣人愛の掟 6 — 『レビ記』第十九章二—二三節

第V部 キリスト教と愛

第一章 キリスト教と愛

第二章 二つの愛の掟

第三章 神を愛するとはいかなることか

第四章 イエスにとって神を愛するとはいかなることか

第五章 イエスにとって偶像とは何か

第六章 隣人を愛するとはいかなることか

第七章 イエスにとって隣人を愛するとはいかなることか

第八章 隣人とは誰か

第九章 イエスにとって隣人とは誰か

第一〇章 自分のように人を愛するとはいかなることか

第十一章 自分のように人を愛するの意味、拡大された自己愛

第VI部 自分のように人を愛するとはいかなることか

第一章 自分のように人を愛するとはいかなることか

第二章 自分が自分を愛していることの確かさ

第三章 自分を愛するように人を愛することができるか

第四章 律法における愛の掟

第五章 律法における「隣人」の意味

第六章 拡大された「自分」としての隣人

第七章 拡大された「自分」としての「われわれ」の諸形態

第八章 拡大された自己愛の限界

第九章 拡大された自己愛から普遍的人間愛へ

第一〇章 普遍的人間愛の限界

第十一章 自愛の再考察

第十二章 自愛と共感

第十三章 隣人とは誰か

第Ⅶ部 二つの掟と新しい掟

第一章 最も重要な二つの掟

第二章 律法の継承と完成

第三章 神の思想の拡大と深化

第四章 隣人の思想の拡大と深化

第五章 二つの愛の関係

総目次

第六章	福音における神への愛
第七章	福音における第二の掟
第八章	自分のように隣人を愛することはできるか
第九章	隣人を自分のように愛しうる可能性の根拠
第一〇章	共通性に基づく隣人愛の限界
第十一章	隣人愛を破壊する自己愛
第十二章	隣人を自分のように愛しうる根拠としての共感
第十三章	隣人愛の可能性と現実態
第十四章	愛の実行の場としての共存
第十五章	共通性と共感に基づく隣人愛の限界
第十六章	限界状況においてとりうる二つの態度
第十七章	新しい掟
第十八章	二つの愛の掟と新しい掟との比較
第十九章	新しい掟における愛の基準としてのイエス
あとがき	
解説	
索引	

第四卷

凡例

まえがき

第一部 マルタとマリヤの問題

第1篇 マルタとマリヤ

第一章 マルタとマリヤ

第二章 マルタとマリヤの話についての問題

第三章 原始教会におけるマルタとマリヤ 1——伝承と出来事

第四章 原始教会におけるマルタとマリヤ 2——出来事の実在性

第五章 原始教会におけるマルタとマリヤ 3——福音解釈の問題

第六章 『ヨハネによる福音書』第一章におけるマルタとマリヤ 1——イエスとマルタ

第七章 『ヨハネによる福音書』第一章におけるマルタとマリヤ 2——イエスとマルタの会話の検討

第八章 『ヨハネによる福音書』第一章におけるマルタとマリヤ 3——イエスとマリヤ

第九章 『ヨハネによる福音書』第一章におけるマルタとマリヤ 4——イエスとマリヤ (続き)

第一〇章 『ヨハネによる福音書』第二章におけるマルタとマリヤ——イエスとマリヤ

第十一章 『マタイによる福音書』第二十六章における類似の記事——『マタイによる福音書』と『ヨハネによる福音書』

の記事の比較

第二章 『マルコによる福音書』第一章における類似の記事——『マタイによる福音書』と『ヨハネによる福音書』

の比較

第三章 『ルカによる福音書』第七章における類似の記事——他の三福音書との比較

第四章 四つの福音書の記事の比較——『ヨハネによる福音書』の「マリア」と『ルカによる福音書』の「罪の女」

第五章 聖書解釈における二つの態度

第六章 聖書の象徴的解釈

第七章 マリアの謎

第八章 福音書と伝承

第九章 四福音書の記述における相違の原因

第二〇章 塗油する女性の伝承

第2編 マルタとマリア（続）

第一章 マルタとマリア

第二章 観想的生活と活動的生活

第三章 観想的生活の優位 1——プラトン

第四章 観想的生活の優位 2——アリストテレス

第五章 観想と祈り

第六章 出家のマリアと在家のマルタ

第七章 私の内なるマルタとマリア

第八章 キリスト教的共同生活におけるマルタとマリア

第九章 マルタの優位

第一〇章 マルタはマリアである

第十一章 働くことが祈ることである

第十二章 ブルジョアのマリアとプロレタリアのマルタ

第十三章 マルタはなぜ叱られたか

第Ⅱ部 生と死の問題

第Ⅰ篇 二つの恵み、生と死

第一講 二つの恵み

第一章 信仰と救い

第二章 二つの信仰

第三章 第二の信仰

第四章 恵みを求める信仰

第五章 恵みとそれを与える者

第六章 戻ってきた一人の信仰

総目次

第七章 感謝と愛

第八章 感謝と信仰

第九章 二つの戻り方

第一〇章 病いの意味

第二講 生と死

第十一章 生と死

第十二章 神話における死後の世界 1——死の経験

第十三章 神話における死後の世界 2——魂の不死

第十四章 神話における死後の世界 3——甦り

第十五章 科学の立場から見られた生死の問題

第十六章 キリスト教の生死観 1——生について

第十七章 キリスト教の生死観 2——死について

第2編 生と死

第一章 生と死

第二章 生の経験と世界

第三章 死はいかにして経験されるか

第四章 死は他者の死の経験を通して知られる

第五章 自分の存在のうちに含まれている他者の存在

第六章 存在の欠落経験としての死の経験

第七章 死の経験を通しての自己の存在の再発見

第八章 死の経験を通しての世界の存在の再発見

第九章 死の経験を通して魂と身体との区別が知られる

第一〇章 他界と魂の存在についての神話の形成

第十一章 魂の起原についての神話の形成

第十二章 魂の世界についての神話の形成

第十三章 生の神秘と神話の形成

第十四章 神話形式の素材と原因

第十五章 人間の生死と自然の生死

第十六章 死者からの通信

第十七章 生死の神秘についての神話、科学、啓示の教え

第3編 魂の不死と人間の尊厳

第一章 死んだらどうなるか

第二章 死後の問題についての三つの見解

第三章 死ねばすべてなくなるといふ説について

- 第四章 この説によれば人生の意味はどのように考えられるか
 - 第五章 この説によれば人間の尊厳はいかにして実現されるか
 - 第六章 恵まれなかった人々は人生にいかなる意味を有するか
 - 第七章 魂は不死であるという説について
 - 第八章 不死なる魂についての二つの説
 - 第九章 一つの普遍的魂が不死であるという説
 - 第一〇章 本来の自己の自覚
 - 第十一章 この説において人生の意味はいかなるものと考えられるか
 - 第十二章 個人の魂が不死であるという第三の説について
 - 第十三章 個人の魂の不死の形而上学的根拠
 - 第十四章 魂の不死なる部分としての知性
 - 第十五章 不死なる魂としての知性の本質と存在
 - 第十六章 不死なる魂の創造
 - 第十七章 創造的世界観において人生の意味はどのように考えられるか
 - 第十八章 死後の世界
- 第4篇 生死の問題——死んだらどうなるか**
- 第一章 生死の問題

第二章 生の経験と死の経験

第三章 死んだらどうなるかという問題

第四章 第一の答。死んだら灰になる

第五章 第二の答。自然の生命に戻る

第六章 生命の形とはたらき

第七章 生物のはたらきの目的

第八章 個的生命と普遍的生命

第九章 第三の答。魂は不死である

第一〇章 感覺的魂と理性的魂

第十一章 理性的魂の不死

第十二章 不死であるのは普遍的理性か個的理性か

第十三章 死後の魂についてのキリスト教の説

あとがき

解説

索引

第五卷

総目次

凡例

まえがき

第Ⅰ部 世界の意味

序

第一章 世界の概念

第一節 原初的に与えられている世界了解

第二節 全体としての世界

第三節 場所としての世界

第四節 統一としての世界

第五節 限界としての世界

第六節 世界の場所

第二章 自然の世界

第一節 原初的に与えられている世界そのもの

第二節 物質の世界

第三節 物体から身体へ

第四節 類としての人間の世界

第五節 生物の世界

第六節 二つの世界の関係

第七節 自然の世界

第三章 表象の世界

第一節 表象としての世界

第二節 表象としての世界を限界づける地平

第三節 世界表象を形成する地平の二重の役割

第四節 地平によって知られる二つの世界表象の区別と関係

第五節 表象の世界の多元性

第四章 客観の世界

第一節 多元的表象世界の外なる世界における出会い

第二節 外なる世界としての自然世界

第三節 ゲマインシャフトにおける表象の世界の共有

第四節 ゲマインシャフトにおける客観の世界

第五節 修羅の世界

第六節 理性の世界

第七節 ゲゼルシャフトにおける客観の世界

第五章 対象の世界

第六章 実在の世界

第一節 真実の世界と虚偽の世界

第二節 客観の世界の虚偽と真実

第三節 対象の世界の虚偽と真実

第四節 根原的世界の实在性

第五節 根原的世界と私

第六節 根原的世界と理性

第七章 世界の意味

第一節 「意味」の三つの意味

第二節 第三の意味での「意味」

第三節 世界の意味

第Ⅱ部 行為と能力——トマス『神学大全』第一部第七八問——三項、第二部の一、第一問一項を中心に

第一章 人間の行為と人間的行為

第二章 人間の行為の個別性 1——人間の個別化

第三章 人間の行為の個別性 2——行為の個別化

第四章 人間の能力について 1——本質と能力

第五章 人間の能力について 2——能力の分類

第六章 人間の能力について 3——生活能力の分類

第七章 人間の能力について 4——生活能力と環境

第八章 感覺能力について 1——生活能力と感覺能力との比較

第九章 感覺能力について 2——感覺能力の構造

第一〇章 感覺能力について 3——感覺能力の分類

第十一章 感覺能力について 4——自然的變動と心的變動

第十二章 感覺能力について 5——自然的變動の場としての自然的存在

第三部 人間的行為と人間の行為——トマス『神学大全』第二部の一、第一問一項を中心に

第一章 人間的行為と人間の行為 1——*homo inquantum est homo* の意味

第二章 人間的行為と人間の行為 2——*dominus suorum actuum* についての疑問

第三章 人間的行為と人間の行為 3——はたらきの能力としての *ratio et voluntas*

第四章 人間的行為と人間の行為 4——*ex voluntate deliberata* の意味

第五章 人間的行為と人間の行為 5——*voluntas deliberata* における *ratio* の役割

第六章 人間的行為と人間の行為 6——*ratio* によって考量されるべきことがら

第七章 人間的行為と人間の行為 7——*ratio* の考量の行われるべき空間

第八章 人間的行為と人間の行為 8——理性と感覺との相違についての問題

第九章 人間の行為と人間の行為 9 — 技術的理性についての問題

第一〇章 人間の行為と人間の行為 10 — 反省的理性の問題

第IV部 善のラチオについて

第一章 善とラチオ

第二章 「欲求されうるもの」としての善

第三章 「欲求されうるもの」と「完全なもの」

第四章 両者の関係についての疑問

第五章 「…である限りにおける…」という規定としてのラチオ

第六章 「欲求されうるもの」と「欲求する者」とのラチオ的相関

第七章 ラチオとしての「完全なもの」

第八章 ラチオ的考察の方法

第九章 ラチオを生み出す知性のはたらき

第一〇章 主観的見解と普遍的知性

第十一章 私の知性と普遍的知性との関係

第十二章 個的知性のうちに含まれる普遍的知性

第十三章 対話する知性、私の知性からわれわれの知性へ

第十四章 対話する知性の限界、共通性と普遍性

第一章	共通認識の根原と普遍認識の根原
第二章	普遍認識の根原としてのものの経験
第三章	ものとの対話としてのものの経験
講演	マルタとマリア

あとがき

解説

総目次

索引